

## 1. このガイドラインについて

明日の人工的な環境の質を決定するのは今日の子供たちである。教育がはぐくむ知識、技能など様々な能力によって、かれらは豊富な知識と健全な感覚でものごとを決定する力を持つようになる。

従来からある教科を教えるときに人工環境の問題を取り込むと、ものごとに対する洞察力、市民の責任、文化の理解、社会性、環境の維持努力などを扱うことにもなる。

人工環境の教育 (Built Environment Education 略してBEE) についてジニー・グレイブス\* は次のように定義している。

建築その他の物質文化の様々な側面が人工環境教育の対象になる。それには、都市の計画、建築と景観のデザイン、歴史的地域の保存、そしてそこから起こる疑問と議論について教え学ぶことが含まれる。一般的には、自然環境にたいして人間が干渉する目的と手段、条件と結果のどれもが人工環境教育という教科全体を形成するといえる。これには生徒たちに自然環境に適合するように人工環境を扱うことを教えることも含まれる。

人工環境教育はさまざまな場所、物、プロセスなど、すなわち、公園、街路、学校、銅像、標識などあらゆるものに関連している。資源リサイクル、モデル共同体の開発なども同様である。それはまた、歴史的保存地域の決定とか、環境保護と開発の対立を解消することなどの社会的な問題にまで及ぶ。

人工環境の教育にたずさわる人びとは、過去と現在、また世界のさまざまな場所の人間とその環境の相互関係について生徒たちの知識が増えることを願っている。それはまた、環境問題を真剣に考える力を向上させたいという願いでもある。かれらの望みは、様々な人の異なったニーズに配慮した美しい、機能的な、安全にデザインされた質の高い人工環境をめざす心と歴史を大切にする態度を育てたいということなのである。

世界建築家連合UIAの人工環境教育作業部会は、世界各国の建築家がそれぞれの国の学校において教師や生徒たちとの協力を成功させるためにこのガイドラインを作った。それは以下の3つのアプローチに分かれている。

その 1. 学校における建築家：教師と生徒と建築家が効果的で実地的な協力体制をつくるためのガイドライン

その 2. カリキュラムの要素：質の高い人工環境学習カリキュラムをつくるためのガイドライン

その 3. 教師のトレーニング：教師に環境と建築についての十分な知識と理解を与えるためのガイドライン

これらのガイドラインの対象になる子どもたち。

レベル	年令
就学前	2-5
小学校	6-12
中学校	13-15
高校	16-18

\*ジニー・グレイブス (Ginny Graves) 米国建築家協会前教育部長